

グローバル・シティと植民地都市

——大連市の事例から——

佐藤 量

立命館大学大学院先端総合学術研究科博士課程の佐藤量です。連続講座「グローバル・シティ（世界都市）の問題－上海／東京／大阪」のなかで「上海」の部のコメンテーターを勤めさせていただきます。私は中国大連市を対象に、旧植民地都市・大連の都市再開発とその変容を都市人類学の視点から研究しています。今回のテーマは「グローバル・シティ－上海」ですが、私の調査地である大連もグローバル化の進む大都市です。王貽志先生、郭潔敏先生のご発表を踏まえながら、植民地都市から中国有数の経済産業都市へ変容をとげた大連市の事情をお話したいと思います。

大連市は中国東北部・遼寧省の都市で、遼東半島の先端に位置します。日露戦争の激戦地であった旅順は同じ大連市内にあります。大連は1904年から1945年までのおよそ50年間、帝政ロシアと日本国の統治を受けていました。ロシアは一寒村だったこの地に港を筑港し、日本は国策会社である南満州鉄道株式会社を中心となって都市建設を進めました。宗主国は港と鉄道を建設することから植民地統治をはじめたわけです。太平洋戦争終結後の1945年からは日本にかわってソ連軍が大連を統治しました。そして1949年に中華人民共和国が成立したことによって大連は中国の都市になります。

1999年に市制誕生100周年を迎えましたが、他の中国の都市とくらべて大連の都市の歴史は100年あまりしかありません。しかもその半分は植民地統治の歴史でした。その短い間に大連を統治する主体はめまぐるしく変わり、ロシア人や日本人だけでなく、朝鮮人、ユダヤ人、モンゴル人、欧米人など様々な出自を持つ人々がこの地に暮らしてきました。

1980年代以降、鄧小平による改革開放政策によって中国全土で急速な経済成長が進みました。大連でも大連港を中心とした経済産業都市として発展が見込まれ、大規模な都市改造が進められます。中国中央政府の後押しもあり、1984年には「沿海開放都市」¹⁾に指定されました。これにより大連市は経済・産業都市として再開発が始まり、中国でも有数の港湾都市として中国東北部の経済をリードするようになります。

これら沿海開放都市には「経済技術開発区」という別個の都市とも見える巨大なゾーンが既存の都市に隣接して作られました。ここには世界中の企業が集まり、会社や事務所だけでなく、マンションやショッピングモール、学校、公園が設置された人工都市です。上海にはこの開発区が3つありますが、それ以外の都市には一つずつ設置されています。大連の開発区は、中心部からおよそ27キロ離れた沿海部に設置されました。2002年から大連市内に通じる軽便高速電車が開通し、大連中心部までおよそ20分で到着します。2003年現在、この開発区には1500社の外資系企業が誘致されており、内、420社が日系企業です²⁾。

このように大連は、ロシア・日本によって建設された植民地都市から、中国東北部の経済産

業の中心地である沿海開放都市として発展してきました。かつては植民地都市として、現在は沿海開放都市として、港と鉄道を中心に発展してきた大連は、都市を統治する国家は幾度かわりながらも、今も昔もグローバル・シティといえるでしょう。

さて、王貽志先生のご発表では、改革開放以降、上海が発展してゆく過程でどのような問題に直面し、今後どのように取り組むべきかを経済学の観点からお話いただきました。ご発表のなかで現在上海が直面しているグローバル・シティの問題として、地域間格差の拡大による“人口流動”を挙げられました。農村から都市部への人口移動は上海のような大都市に顕著な問題ですが、大連も例外ではありません。近隣の中国東北部各地や、山東省、河北省などから多くの労働者がやってきます。労働者の多くは大連市郊外に新設された開発区などで、住み込みで働いています。かつての大連のように、現在の大連でも所得による棲み分けの構図が現れてきました。

植民地時代の大連は、民族によってはっきりと棲み分けられていました。棲み分けの境界には広い街路や公園が設けられおり、宗主国にとって機能的な計画都市でした。そもそも大連の街の基礎をつくったのはロシアです。パリをモデルにして円形広場を中心とした街路が放射線状に伸びる設計でした。西安や北京に代表されるように、古くからの中国の都市は城壁で囲まれており、街路は放射線状ではなく碁盤目状です。大連は既存の中国都市に併設された植民地都市ではなく、植民地統治を目的として一から築かれた植民地都市でした。

ロシアは街を二分して東に西欧人街、西に中国人街を建設し、その間には大きな公園が作られました。さらに西欧人街は行政区とヨーロッパ市街区にわけられ、ヨーロッパ市街区は商業区／市民区／邸宅区に分割されました。大連統治がロシアから日本に代わっても棲み分けの原則が採られ、ロシア時代に西欧人街であった場所には日本人が住みました。都市の中心部に日本人や西欧人が住み、周辺に中国人などその他の民族が住むように構造化されてきました。当時の大連住人の方にお話をうかがうと、「日本人街からあまり出たことはなかった」「中国人街には行ったことがなかった」とおっしゃる方が多くいます。

大連と移住民の関係は密接です。大連は創設期から移民都市でした。帝政ロシア時代の1902年当時の大連総人口は4万人強で、そのうちロシア人は約7%にすぎず90%以上が中国人でしたが、この中国人人口のほとんどが男性だったといえます³⁾。多くが建設業や港湾労働に従事していました。このことはほとんどの中国人が他の場所から移住してきたことを示しています。

港湾労働に従事する低賃金労働者は一般に「苦力」と呼ばれていました。彼らの様子は当時の写真資料などから知ることができますが、中島敦の『D市七月情景(一)』⁴⁾という短編小説には生活の様子が描かれています。また現在大連で話される中国語には山東訛りがあるといわれますが、これは多くの山東省出身者が大連に移り住んだ名残といわれています。さらに帝政ロシアと日本統治期には、ロシア人、日本人のみならず、朝鮮族、モンゴル人、ユダヤ人、欧米人などが住む国際移民都市でした。現在でも周辺からの出稼ぎ労働者に加え、外資系企業で働く日本人や韓国人、欧米人がすんでいます。

このように、棲み分けの構造と人口流動は植民地都市には起こりうる現象ですが、現在の大連でも似たような状況が見られることから、植民地都市とグローバル・シティの類似性を指摘

できるかもしれません。

次に、郭潔敏先生からは、上海への“人口流動”がどんどん拡大する現在，“多種類文化生態の共存”と“都市文化の発展”をどのように進めてゆくかが問われているのご指摘がありました。そこで上海の推し進める都市文化の発展政策のひとつに，“伝統文化の振興”をあげられました。

近年、「伝統」「文化」「歴史」という言葉は、上海をはじめ中国各地で注目されています。その発端ともいえるのが、中国中央政府による「歴史文化名城」⁵⁾の指定でしょう。歴史文化の豊かな都市を政府が主体的に保護してゆくこの政策は、先に述べた「沿海開放都市」の指定と同時期に行われました。1980年以降中国全土で急速な経済成長が進み「沿海開放都市」の指定が進められる一方で、数多くの歴史的建造物や歴史文化的都市が再開発にさらされていました。数ある歴史都市のなかで特に歴史的な重要性が高いとみなした都市を「歴史文化名城」として指定し、歴史文化の保護を命じました。現在では102都市が「歴史文化名城」に指定されています。

近年大連市でも「都市文化」や「都市文明化」といった言葉を目にします。高層ビルが林立する一方で、都市中心部の緑化も進められ、環境都市大連というイメージができつつあります。けれども、もともと都市の歴史が短く、移住民によって構成されてきた大連では、古くからの固有の大連伝統文化がありません。大連市は「沿海開放都市」に指定されましたが、「歴史文化名城」には指定されませんでした。

けれども大連市は、都市再開発の一環として歴史文化保護政策をはじめます。植民地統治時代の建造物を保存・再利用するという事業です。上海のバンドのように、植民地統治を象徴する建造物が積極的に保存され、再利用されています。保存の形態は、建物単体として保存するのではなく、町並み・景観として保存されています。大連で代表的な保存地区はロシア人街／日本人街と、中山広場です。

ロシア人街／日本人街は、ロシア人、日本人が多く住んでいた地区です。これらの地区は現在、観光地として保存・再利用されており、「異国情緒」を演出しています。ロシア人街は、ロシア風建築林立するストリートで、街路はきれいに舗装されています。ロシア民芸品を売る土産屋や、ロシア料理を振舞う店が軒を連ねます。かつて植民地統治を体験したこの場所は、観光産業や都市再開発といった国境をこえた資本とむすびついています。

しかし一本路地を入るとそこには古いロシア人住宅街が広がっています。道はでこぼこで大きな水溜りがあちこちにあります。もちろん現在の住人は中国人の方々ですが、もともと大きなお屋敷だったロシア人住宅には、一階と二階では異なる家族が住んでいることがよくあります。この地区に住んでいるのはおもに低所得者層です。表通りの華やかな観光地化されたロシア人街とは対照的に、古びた旧住宅は現在でも生活の場として機能していました。

表通りのロシア人街の建物はきれいに保護されていますが、生活の場になっている旧住宅は放置されたままです。日本人街でも同様なことがいえるでしょう。近年大連市中心部の都市再開発が着々と進んでおり、これら路地裏の風景は近い将来見られなくなると思います。その際この住人たちはどこにゆくことになるのでしょうか。住人が立ち退いたあとの場所には、き

れいなロシア人街や日本人街が広がっていることでしょう。

一方、中山広場は大連市の旧建築保護活動の中心的な場所です。場所も大連市の中心に位置します。ロシアが設計し、日本が建設した円形広場です。広場を取り囲むように日本統治時代の旧建造物が建ち並び、広場からは10本の街路が伸びています。ロシア時代にはニコライフスカヤ広場、日本統治時代には大広場、そして現在は中山広場と呼ばれています。日本時代には、広場を取り囲むように大連市役所、大連警察署、ヤマトホテル、横浜正金銀行、朝鮮銀行、大清銀行、イギリス大使館、大連通信局、東洋拓殖会社といった重要な施設が建てられていました。今は撤去されていますが、戦前期には広場の中心部分に大島義昌中将の銅像が建てられていました。この広場は、まさに植民地都市・大連の中心に位置する広場でした。

中山広場ではこれらの建物が保存・再利用されています。旧ヤマトホテルや旧大連市役所など植民地統治の権威的な建造物が夜になるとライトアップされ、建物の前の広場では人々が憩います。これらの保護活動からは「屈辱の歴史を忘れない」ためであることはもちろんですが、同時に「異国情緒」という価値観の変容も見取れます。植民地体験すらも固有の自文化として取り込んでしまうような強さも感じます。

こうした都市再開発における「伝統」「文化」の保護活動は、国境をこえたグローバルな展開を見せる一方で、常に都市生活者の隣で行われており、時として生活者を脅かす危険性をほらんだローカルな問題でもあります。誰が誰のために実施する都市再開発か、誰のための「伝統」「文化」の保護活動なのかを注視してゆくことが重要だと考えます。

上海も大連もグローバル化のなかで、都市の様相が刻々と変化しています。そこでは情報が飛び交い、人々が移動し、交流しながら新しい文化が生まれつつあります。グローバル・シティをめぐる問題は今後ますます顕在化するでしょうが、外から眺めているだけでなく、現地に立って考察し続けてゆくことが大切だと考えます。

以上をもってコメントに代えさせていただきます。ありがとうございました。

旧・植民地都市大連／現・沿海開放都市大連 比較表

	旧・植民地都市大連	現・沿海開放都市大連
a.所属	日本国の租借地、関東州の都市	中国遼寧省の都市
b.面積	約36.8平方キロメートル(2.3平方里)[1937年]	大連市全域面積約12,574平方キロメートル 市街区面積約2,415平方キロメートル [2004年]
c.総人口	1906年：32,836人→1942年：769,467人	2004年：約560万人 そのうち、都市人口(都市戸籍)：約310万人、農村人口(農村戸籍)：約250万人
d.住民構成	・中国人がもっとも多い。 1940年当時：中国人438,132人、日本人182,493人 ※日本人には「朝鮮人」を含む ※中国人は、「漢人」と「満州人」をあわせた人々とする ※中国人の大半は、国内からの移住民 ・そのほか、日本人、ロシア人、その他の欧米人 →移住民によって構成された都市→「原住民」がいない →多数の新聞社が存在	・中国人人口のうち94%が漢民族 ・日本人、韓国人、ロシア人、その他の欧米人 ・90年代以降、外資系企業に勤める外国人居住者が急増 ・都市戸籍と農村戸籍の別 →都市戸籍平均年収：8200元、農村戸籍平均年収：4140元[2003年]
e.地区区画	金融地区、行政地区、商業地区など、目的ごとに分けられた都市計画	・市街区の区画は戦前を踏襲する。 ・1984年、郊外に広大な経済技術開発区設置→農村戸籍の労働者多数
f.広場	・ロシア時代のニコライフスカヤ広場、日本時代の大広場が、行政と経済をつかさどる市街区の中心 ・この広場から10本の街路が延び、その他の5つの広場を結んでいた	・1945年に大広場は中山広場と改名。 現在大連には多数の広場が建造され「広場の街」と呼ばれるほど広場の多い都市。 広場の数は30を超える ・中山広場は多くの広場のひとつの広場となった。
g.住居区画	人種、民族によって住む場所が異なる ・市街区：ロシア人、日本人、欧米人 ・郊外や下町：中国人 →公園、大きな街路によって「棲み分け」(見えない城壁)	・1945年に旧日本人住宅地が、低所得者中国人に分配される。 ・「日本および傀儡政府(満洲国政府)のすべての軍財産、政府財産の接収あるいは没収にかんする規定」公布 →所得による「棲み分け」がある
h.産業	・製造業、鉄鋼業が中心(満鉄関係) ・大連駅、大連港を利用し、宗主国日本をはじめ、諸外国と交易	・製造、鉄鋼業に加え、電子、軽工業、食品産業が盛ん。 ・開発区の外資系企業数は9,112社で、そのうち日系企業は2,482社(2003年12月現在)で、外資では最多。

普及版『大連市史』昭和11年度版、『大連統計年鑑』2000年などを中心に著者作成

注

- 1) 「沿海開放都市」とは、改革開放政策の一環として1984年に中国中央政府が指定した経済産業都市である。中国沿岸部の都市をいくつか指定して、経済技術開発区を建設し経済発展を優先的に実施した。全国で14都市が指定された。大連、秦皇島、天津、煙台、青島、連雲港、南通、上海、寧波、温州、福州、広州、湛江、北海の14都市である。
- 2) 2004年度版大連市投資ガイドによる。
- 3) 西澤泰彦『大連都市物語』1999、河出書房新社、pp31参照。
- 4) 中島敦『D市七月情景(一)』は、1993『中島敦全集1-3』、ちくま文庫におさめられている。
- 5) 1982年、1986年、1994年と三次にわたって公布され、2001年に2都市、2004年に1都市が追加された。現在この「歴史文化名城」には102都市が指定されている。

大西国太郎編『中国の歴史都市』[2000]によると、「歴史文化名城」の種類は以下の7つに分類されるという。①古都型 - 都城遺跡があり、古都にふさわしい風格がある都市。北京、西安など。②伝統風貌型 - 歴史的に蓄積された建築群を残す町並み。平遥、韓城など。③風景名勝型 - 自然環境に優れた特色がある都市。桂林、蘇州など。④地方民族特色型 - 地域的、民族的に独自の特色を有する都市。麗江、拉薩(ラサ)など。⑤近現代史跡型 - 歴史上の一大事件を反映する史跡がある都市。上海、遵義など。⑥特殊産業型 - 特定の産業で歴史的に突出する都市。自貢、景德鎮など。⑦一般史跡型 - 全域に文物古跡が分布し、歴史的伝統を体言する都市。長沙、済南など。

